

インタープリテーション概論 2

テーマ・ゴール・オブジェクティブ

(ボブ・ロニー)

私は以前このヨセミテで地質の講義をしたことがある。難しいテーマなので方法をあれこれ考えた。暑い日だったので製氷器から氷をとりだして食べようとしたとき、ふと氷を使う解説のアイデアが浮かんだ。そして氷を全部バックパックに入れた。参加者を連れて岩壁のそばに出かけ氷を一つづつわたし、ビジターに氷のかけらを使って岩を削らせた。しかし岩は削れない。さらに氷をくばってけずらせた。そしてどれくらいの時間をかけて谷が削られたか、どれほど強い力が働いたかを想像するように問いかけた。その後食べるための氷をわたした。いつも頭を柔らかくしてアイデアが出てくるようにしている。それが創造性につながると思う。これからガイドウォークを始める前に何を準備すべきかお話しする。文章を作るときに、よく考え、準備することが必要なように、トークでも計画が必要だ。私たちはプログラムの計画の際に T G O、すなわちテーマ (Themes)、ゴール (Goals)、オブジェクティブ (Objectives) を使っている。

ゴールは目標を意味する。人によっては到達点、方向などとする場合もある。インタープリターがゴールを考えると、ビジターに何を理解してもらいたいのか考えるだろう。ゴールは、「なぜこのウォークをするか」という問いかけの答えだ。だれかは「仕事だから」と答えるかもしれない、ある人は「山が好きだから」、ある人は「話をするのが好きだから」というかもしれない。でもこれらはインタープリテーションのプログラムとしてはいい目標ではない。インタープリテーションの目標では何を伝えるかを考えなければならない。考えるべきは自分の話によって何を解決したいかと言うこと。例えば「野生動物の餌付けをやめさせる」ということがゴールとしよう。

次にテーマを考える。テーマはストーリー性をもっている。テーマはビジターに餌付けをさせないためのストーリーを物語るものだ。たとえば「ヨセミテのミュールディア (シカ) は素晴らしい動物ですが、人間の餌付けによって傷つきやすいものです」など。前の講義で「さわれるもの」、「さわれないもの」の話をしたが、よいテーマというのはその両方が中に入っている。「シカ」は触れる、「素晴らしい」はさわれない。また「動物に餌をやるべきでない」という行動は触れない概念である。もっとシンプルな例は「食べ物は愛です」という解説だ。食べ物そのもののインタープリテーションを行うのではなく文化とのつながりについて話すのであれば、そんなテーマをつけるだろう。テーマは簡潔に短くすることが重要だ。プログラムを考え、書き留め、考えを発展させるときに、テーマをいつも頭に置いておき、テーマを常に考え直し、テーマが内容によってフォーカスされているかどうかをもう一度検証する。

ゴールは、なぜプログラムをおこなうか自分の問いへの答えであって、

テーマはこれから話すことの物語である。シカの例でもう一度整理すると、ゴールは「人がシカに餌をやらないようにすること」で、テーマは「シカは美しい生き物だが、人間が餌をやることで傷ついてしまう」のようになるだろう。

次はオブジェクティブ（ねらい）。ある人はゴールとオブジェクティブは同じだと思っている。英語では二つの用語は似ている。しかし別の意味がある。例えばビジターは法律を知らないがために餌を与えているとするなら、その場合のオブジェクティブは一つは法律を知ることになるだろう。世の中には法律を知っていながらも餌付けをする人もいる。シカの生活についてや、人間の食べ物がシカにとってよくないことを知らないビジターであれば、シカを大切にしないかもしれない。そのときはそのような具体的な知識を与えることがオブジェクティブになる。教育的見地からすると、オブジェクティブは、ビジターがプログラムの後でできるようになることのリストを表している。例えば一つ目のオブジェクティブは「ビジターはプログラムのあとに法律を知る」、2番目は「ビジターはプログラムのあとにシカの生活について重要な要素を3つあげることができる（例えば、食性とか）」、3番目は「ビジターはプログラムのあと人間の食べ物がシカにとってよくない理由を二つ挙げられるようになる」などとなるだろう。インタープリテーションを計画する場合、オブジェクティブには、ビジターがプログラムのあと何を学んで帰るか、何ができるようになるかを具体的に示す。このような計画によってプログラムを他の人に教えられるようになる。これらはプレゼ

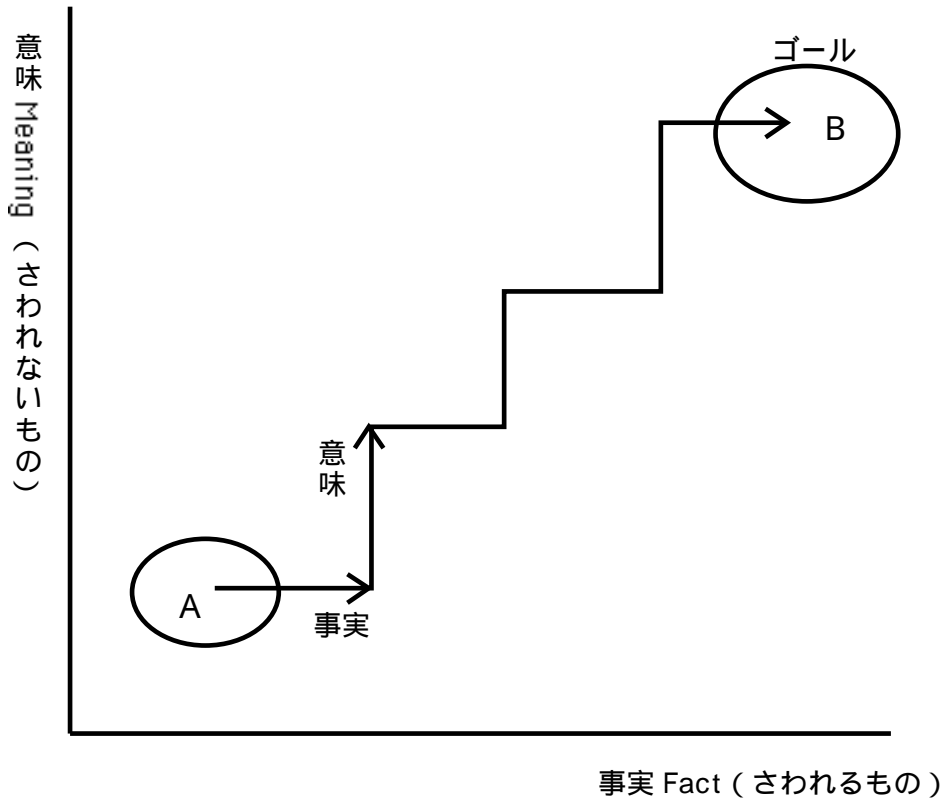
ヨセミテでは施設地区でもごく普通にシカを
みることができる



ンテーションの技術と別のものだ。これら3つ(TGO)をうまく使えていない人をよくみる。この3つの順をたどることのできない人もいる。

インタープリテーションの考え方のモデル1

インタープリテーションの考え方についてのモデルを紹介したい。下図がインタープリテーションの地図だとして。プログラムの始まる前、ビジターはAにいる。プログラム終了後ビジターにはBに行ってもらいたい。山や谷があるのでまっすぐにそこに行くことはできない。ジグザグに行くことになる。これがインタープリテーションプログラムの外観だ。水平の軸の方向では「さわられるもの」について学ぶ。たとえば山とかアザラシとか、氷河とか。人々が意味を理解するのに必要なものをいくつかを教える。縦の軸方向は抽象的な概念、「さわれないもの」だ。情報を与えることによってさわられるもの(事実fact)を、さわれないもの(意味meaning)と結びつけていく。これがジグザグ道のように連続する。テーマはこの道を導く。例えば「いまあそこにいるのはシカです」と言ったとすると、これは事実。「毛を見て下さいきれいですね」これは触れない。「シカは子供をミルクで育てる人と同じ哺乳類です。そしてシカは人の子みたいになんでもたべてしまう」(事実)、「だから子供に不健康なものを与えてはいけない」(意味)。「シカはポテトチップを食べ、ふくろさえも」(事実)、「あなたが8才の子供だとして、もし袋を食べたら病気になってしまうでしょう」(意味)。このように事実を意味と関連づけながら、シカに餌を与えてはいけないと言うこと



図：インタープリテーションの地図

を学んでいく。これはごく簡単にした例だが、私だったらシカが実際にビニールを食べて死んだことなども話すだろう。胃の中で具体的にどうなったのかを伝える。シカの行動や個体群の生態についても説明するだろう。人の食べ物で死ぬと言うことと、シカの生態の両方を話し、その関係を伝えていくだろう。私の参加者は「さわれるもの」と「さわれないもの」の間を進んでいく。ビジターは頭と心で理解するようになる。

そして私たちは、いつもいつもビジターを到達点に連れていけるわけではないと考えている。よいインタープリターはそれを理解しながら、できるだけビジターを目標の方向に連れていこうと努力するのだ。

先に述べたTGOを設定することと、この地図の両方を行ってプログラムを計画することが成功の鍵だと思う。

インタープリテーションの考え方のモデル2

もう一つ、インタープリテーションを成功させるための方法（公式のようなもの）をお教えしたい。

$$(K_v + K_r) A_t = I O$$

K_v はビジターの知識（knowledge of visitors）、 K_r は資源についての知識（knowledge of resource）、 A_t は適切な技術（appropriate technique）、 $I O$ はインタープリテーションの成果（Interpretation Opportunity）をあらわしている。インタープリターがビジターに何かを理解する機会を提供する。インタープリターの中でインタープリテーションがおこるのではなくインタープリテーションはビジターの中でおこる。インタープリターができるのは提供することだけ。だからインタープリテーションがいつもうまく行くとはい限らない。プログラムを正確に行うためには、まずその対象者についてよく知らなければならない。ビジターは何を考えるか、私たちの話をどれだけ理解してくれるか。ある人は自然をおそれているかもしれない、牧場から来る人は自然が敵だと思っているかもしれない。すべてのビジターは違う考えを持っている。例えばこどものグループが来たとする。子供だったら学年によって、どんな知識があるか、どんなことに興味あるか、どうしたらよく学べるか、ゲームが効果的か、岩に座って静かに話した方が効果的か、知っていなければならない。これらが K_v である。

次に資源について知ること（ K_r ）、研究、調査し、ビジターについての知識と資源についての知識を混合して適切な方法を選ぶ。もし適切な技術（ A_t ）を使っていなければ、インタープリテーションのよい機会を作ることはいできないし、ビジターについての知識が不足していれば、技術が生きない、これらすべてのバランスをとることが必要だ。

$I O$ はインタープリテーションの成果。正しい K_v と K_r 、 A_t があればよい成果を得るだろう。正しい方法でインタープリテーションしたなら、その成果としてレンジャーがいなくてもビジターがシカに餌をあげなくなるは

ずだ。

カリキュラムガイド

カリキュラムとカリキュラムガイド

(スー)

事前アンケートへのご協力ありがとうございました。皆さんがいらっしゃる前の事前準備でたいへん役に立ちました。皆さんのうちの何人かは学校対応の仕事などに係わっていると思う。または他の対象者に対応している方もいらっしゃるだろう。今日お話しするのは学校対応のカリキュラムについてだが、他のグループにも応用がきくと思う。カリキュラムの概念は少し難しいので申し訳ないが室内でレクチャー形式でやりたいと思う。最初に言葉の定義、次にアクティビティを行い、そのあと実際にみなさんに作っていただく実習という流れで進行したい。

この部分の講義の後に、内容を要約した資料が配付された。重複するが、資料1として添付する。

カリキュラムというものは幅が広い言葉であり、学校の教師や校長と国立公園では違った意味でこの言葉を使っている。学校の先生は指定された年間



教科別のカリキュラムフレームワーク

の学習指導要領にもとづいて授業を進めている。学校教育関係者にとってのカリキュラムは先生達に対するこのような指導のガイドラインを意味する。これらは学年によっても異なるし、国や州が示す大カリキュラムに沿っている必要がある。概要（フレームワーク）を表した教科別の資料が作られている（写真）。

国立公園のインタープリターにとっては、対象となるそれぞれのグループ